

鳥のフィールドサインに注目

箕輪 義隆

冬のヨシ原、耳を澄ませると、遠くで“パチ、パチ”と小さな音が聞こえてくる。しばらくしてヨシ原に分け入ってみると、茎の表面にいくつものささくれが見つかった。これはオオジュリンの食痕で、先ほど聞こえたのは葉鞘を剥がす音だったのだ。このような生活痕跡＝フィールドサインは、鳥のいる場所ならどこでも存在する。普段の野鳥観察とはちょっと目線を変えて、フィールドサインに注目してはいかがだろうか？

そもそも、フィールドサインとは何だろう？ 一般に、野生生物が残した生活痕跡をひとまとめにフィールドサインと呼ぶ。鳥の場合は、抜け落ちた羽毛、未消化物を吐き出したペリット、糞、足跡、古巣、食痕などが代表的なフィールドサインだ。また、モズのはやにえ、砂浴び跡のように、一部の種に特有の痕跡もある。いずれにしても、鳥は日々の生活の中で、これらの痕跡を残し続けている。ところで、“フィールドサイン”という言葉は哺乳類ではよく聞くけれど、鳥の世界ではあまり耳にしない。理由は簡単。哺乳類は夜行性の種が多く姿を見ることが難しいため、痕跡探しが観察の第一歩となる。ところが鳥の場合、多くは日中活動し観察が容易なため、わざわざフィールドサインを探す必要がないのである。しかし、痕跡を読み解くことができれば、生息の有無だけでなく、それまで気づかなかった生活の一面まで知ることができるかも知れない。



タシギの足跡

例えばタシギの足跡は指が非常に細くまっすぐで、まるで爪楊枝を3本組み合わせたようだ(写真)。冬の湿地では、たとえタシギの姿は見えなくても足跡でその存在に気づくことがある。もちろん、鳥は種数が多いので、どれでも種が判別できるわけではない。むしろ同定可能なのは特徴がある一部の痕跡に限られるが、フィールドサインの特徴や、地域・環境から、可能性が高い種がある程度絞り込むことはできるだろう。これから春に向けて、お薦めしたいのは桜の花蜜を求めてやってくる鳥たちのフィールドサインだ。メジロやヒヨドリはよく桜に飛来し、

細い嘴を花に差し入れて吸蜜するが、嘴が太いスズメは同様の方法で吸蜜できないため、花を根本から切り取ってしまう。蜜を吸った後の花はそのまま捨てるため、スズメが吸蜜した場所には花が散乱しよく目立つ。東京にはもう1種、桜の花蜜を好む鳥がいる。外来種のワカケホンセイインコで、スズメとはちょっと違った痕跡を残す。花が付いた枝を切り取り、片足に持ったまま次々と花をつまみ取るのである。地面には花を切り取られた枝が落ちているので、花見のついでにぜひ探して欲しい(写真)。

フィールドサイン観察の基本は、鳥がいた現場に立ち、鳥が残したものを間近に観察し、時には手に取って考えることだ。鑑識官のように証拠品を探し、その場で起こった出来事を推理することもある。残された痕跡の意味を読み解いた時、フィールドサインは野鳥観察を少し豊かにしてくれるだろう。フィールドサインの観察についてまとめた本を昨年秋に出版したので、興味のある方はご一読頂けると幸いである。

(みのわ・よしたか)

「鳥のフィールドサイン観察ガイド」箕輪義隆著(文一総合出版)★本号11ページでご紹介しています。



ワカケホンセイインコの食痕